



信州の遺跡

第25号

最新発掘調査情報①

県内初のL字形カマド

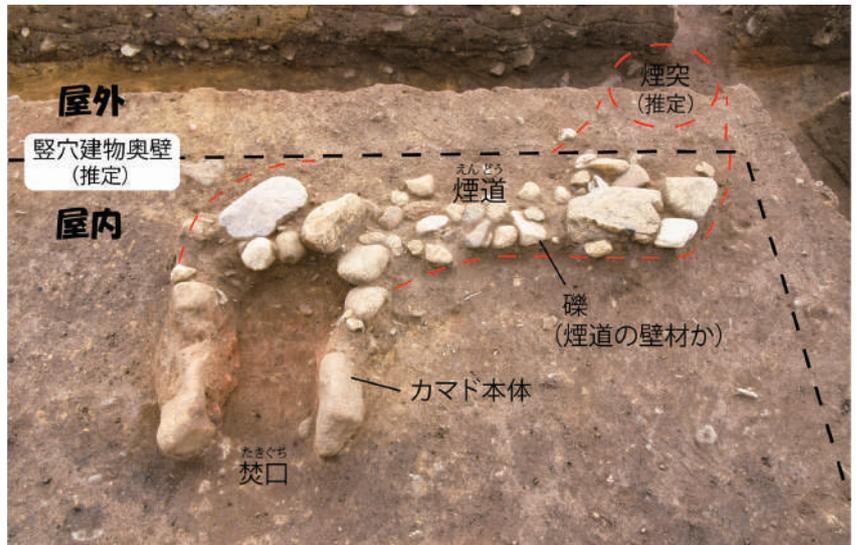
飯田市 ママ下遺跡

ママ下遺跡は天竜川支流・土曾川右岸の微高地に広がる集落跡である。リニア中央新幹線長野県駅とその周辺整備にともない、遺跡のほぼ全域が開発対象となった。飯田市教育委員会は、市の開発事業区域の発掘調査を担っている。令和6年(2024年)の夏から続く本調査では、縄文時代から奈良時代までの多彩で濃密な遺構分布が確認され、リニア駅予定地における過去の営みの深さが明らかになってきた。

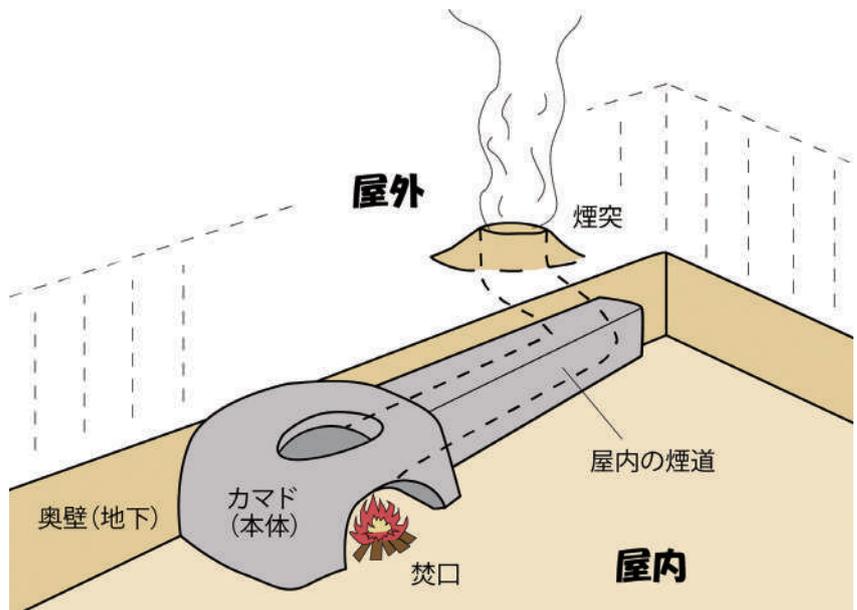
これまでの成果で特に注目されるのが、古墳時代の竪穴建物にともなう「L字形カマド」である。建物自体は他の遺構との重複が著しく全体をとらえることができなかったが、カマドはかろうじて下部が残存しており、焚口から煙道の先端付近までを検出した。

L字形カマドは寒冷な中国東北部や朝鮮半島を起源とし、「カン」や「オンドル」といった暖房設備へ発展したと考えられている。信濃では東・北信地域を中心に律令期の「オンドル状遺構」(「ロ」や「コ」の字状)が確認されているが、本例はL字形構造のカマドとしては県内初とみられる。また、列島における分布は西日本に偏り、東日本ではわずか4例(東京都2例、群馬県2例)にとどまる。伝来の背景に渡来人の関与が想定されるが、調査が及んだのはまだ当遺跡の一部である。今後、集落の全体像が見えていくなかで評価を試みたい。

(飯田市教育委員会 春日宇光)



L字形カマドの出土状況



L字形カマドの模式図(筆者作図)

埴科古墳群を望む古墳時代の居館

千曲市 やしろ 屋代遺跡群

屋代遺跡群は、千曲川が形成した自然堤防および後背湿地に立地する複合遺跡である。令和6年度（2024年度）に市道建設に伴う発掘調査（3,800㎡）を実施し、条里水田（平安時代）の下層から大型溝で区画される古墳時代の特殊遺構を検出した。溝A（周濠）は、総延長70m、上端幅7.5m、底部幅3.0mを測る。調査区北側で直角に西折し、調査区外に続いている。溝Aの内側には、深い掘り込みと一定間隔の小穴をもつ狭小な溝（溝B）が並行して掘削されており、「板塀」の掘方と解釈できる。また、溝と方位を揃えた複数の柱穴列を検出しており、4棟以上の掘立柱建物跡を復元しうる。出土土器は古墳時代中期前半の個体が主体であるが、前期中頃の個体も含んでいる。



以上のような遺構の特徴は、橋本博文が提示する豪族居宅の認定要件（橋本2018）に合致する部分も多い。銅鏡や石釧といった宝器的な器物の出土をみないなどの課題も残るが、現時点では、豪族居宅の蓋然性が高いものと理解する。

本遺構は、森將軍塚古墳や倉科將軍塚古墳などの前方後円墳を視認しうる場所に構築されている。屋代地区は、墓域、居住域、生産域を視覚的に認識できるエリアであり、埴科古墳群と足下の遺跡群は昭和39年（1964年）に東京教育大学の岩崎卓也らによりいわゆる「輪番制論」が提起された学史的な地域である（大塚考古学研究会1964）。

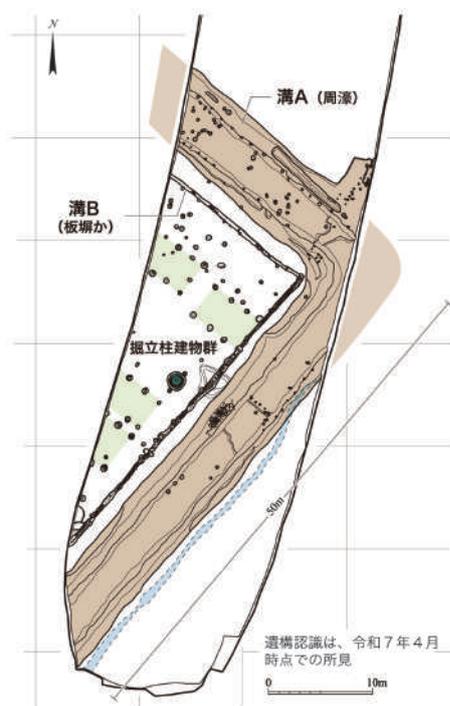
今日では、調査の積み重ねにより、山上の前方後円墳に加え、居住域や水田域についても盛行時期や展開範囲などが詳細に把握されている。本遺構が前方後円墳被葬者の居宅であることが確実にとなれば、生前の活動範囲をより具体的に把握でき、古墳時代の地域景観や領域概念の研究に寄与する重要な成果となる。

（千曲市歴史文化財センター 平林大樹）

大塚考古学研究会1964「長野県における古墳の地域的把握」『日本歴史論究』文雅堂銀行研究社
橋本博文2018「古墳時代豪族居館総論」『古墳と豪族居館』第23回東北・関東前方後円墳研究会



大型溝区画遺構 北より 背後に森將軍塚古墳を望む



大型溝区画遺構 平面図

信州の近代遺跡 松本市 鉄道給水源跡



明治35年（1902年）篠ノ井線松本停車場建築記念列車（松本市立博物館所蔵）

都市計画道路 松本北小松線（あがたの森通り）の道路拡幅に伴い、明治時代の交通施設の遺構である鉄道給水源跡の調査を実施した。地下構造物の記録保存と発掘調査を行い、記念碑の移設や構造物の部分保存を行った。

明治35年（1902年）6月に篠ノ井線（篠ノ井―松本間）の開通と共に松本駅が開業した。蒸気機関車には多量の水が必要であったため、地下水が豊かな現在の松本市埋橋に貯水槽を兼ねた大きなレンガ造の井戸が造られ、松本駅から鉄道給水源まで1.5kmの距離を8.5mの高低差により自然流下で引水していた。

鉄道車両は、時代と共に蒸気機関車からディーゼル車（無煙化）、電車（動力の電化）へと変わりゆく。昭和40年（1965年）には中央東線（東京―塩尻間）が全線電化し、電車基地完成により給水源は廃止となった。その後、給水源跡は「レンガ山」と呼ばれ、昭和57年（1982年）に地上部が取り壊され、道路拡幅により令和6年度（2024年度）には地下の遺構が撤去されることになった。

当初、地上には、かまぼこ型のレンガ造の構造物があったことが絵葉書からわかっている。地下にある貯水槽は、大きさ9.23m×9.14m、深さ約2mのレンガ造（イギリス積）で、壁面に等間隔の集水孔が設けられており、壁厚は東西0.8m、南北1.5mで、下方へ階段状に厚くなっている。赤茶色の素焼きレンガが使用され、刻印はなくセメント目地である。類例調査では、鉄道沿線施設に同様のレンガが使われた傾向がみられ、安曇野市明科の旧第二白坂トンネルのレンガが現地で作られたことから、篠ノ井線により運搬された明科産のレンガである可能性が考えられる。また、明治35年（1902年）の鉄道作業局年報には、鉄道用品としてレンガを521,855,000個、セメントを179,585樽を購入した記載があることから、当時の鉄道施設建設に莫大なレンガの需要があったことがわかる。

今回の調査では、松本建設事務所や工事施工会社に協力頂き、歩道にレンガ壁の部分保存と看板を設置したので、ぜひ現地に足を運んで実物を見てほしい。

（松本市 都市計画課 小林一成）



内部 壁面下方に集水孔が等間隔に入る



北側 階段状に厚みが増す



歩道 新設した説明板と移設したレンガ壁・記念碑

木曾町 国史跡 福島関跡



ふくしまのせきあと
 史跡福島関跡は、江戸幕府が中山道（木曾路）防衛の関門として設置した福島関所の跡である。木曾代官山村家による管理のもと、東海道の新居、箱根、中山道の碓氷とならぶ重要な関所として、厳しい「鉄砲改め」「女改め」が行われた。

近年、インバウンドの増加にともない街道歩きを楽しみたいという需要が高まり、史跡を訪れる人が増えている一方、昭和54年（1979年）に国の史跡に指定を受けた福島関跡では、復元建物やガイダンス施設等の老朽化と旧式化が顕著となり、そのほか保存管理や調査研究を担う人材の不足など多くの課題を抱えている。

こうした現状を踏まえ、木曾町では史跡福島関跡を確実に未来へ継承し、もって地域の発展に寄与できるよう、史跡の具体的な整備方針や内容、事業スケジュールなどを定めた『史跡福島関跡整備基本計画』を令和7年（2025年）3月に策定した。ここでは、計画策定にいたる経過や目指している史跡整備について、近年の調査成果も交えながらご紹介したい。



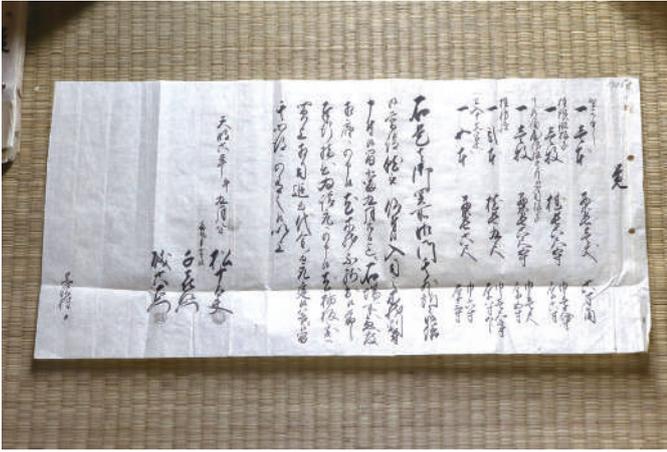
史跡福島関跡周辺の様子

県の南西部に位置する木曾町は、総面積の9割を山林が占める山深い町で、人口は約9,600人（令和7年4月現在）。現状、文化財の専門職員は配置されておらず、史跡整備は一般職員が兼務で担当している。マンパワー不足に悩む小さな町の取り組みは、最初から課題山積で、ときに認識・経験の不足から再検討を求められることが度々あった。しかし、その都度文化庁や長野県、史跡整備委員会の皆様から懇切丁寧な指導助言をいただき、支援業務を受注したコンサルタントの助力も得て、どうにかここまで漕ぎつけたというのが実情である。

関係する皆様のあたたかいサポートを受けながら、令和6年度（2024年度）は整備基本計画の策定にあたり、第4次発掘調査を実施した。この調査では、現地に正確な遺構表示を施すため、過去の発掘調査で検出された遺構の位置関係を再調査（測量）するとともに、平成20年（2008年）に暴風で倒壊した「復元東門」の再建に向け、近世東門とそれに連なる木柵の位置の特定を目指すこととなった。

また、発掘調査に先立ち、地域に散在する文献史料の所在確認もあわせて実施した。その結果、旧黒沢村（現・木曾町三岳）庄屋に伝わった天明6年（1786年）の文書中に、東門修理用材の樹種、寸法、数量のほか、「柱根はしらね 鉏はぼき」「土入十文字木」といった記載がみつきり、少なくとも天明期の修理時は、地下構造を有する門であったことが明らかとなった。

こうした文献調査の成果も踏まえながら、東門及び木柵の推定位置周辺にトレンチを3箇所設定して発掘調査を行なった。残念ながら、今回は東門の位置の特定につながる遺構は検出されなかったものの、先行調査で確認されていた推定中山道路面とそれに伴う礫を再確認するとともに、この路面の継続部分を確認することができた。また、第3トレンチ南側では、推定中山道路面よりも一段高い位置にやや硬い面が検出され、江戸期の番所面と推定



修理用材割付文書（天明6年）



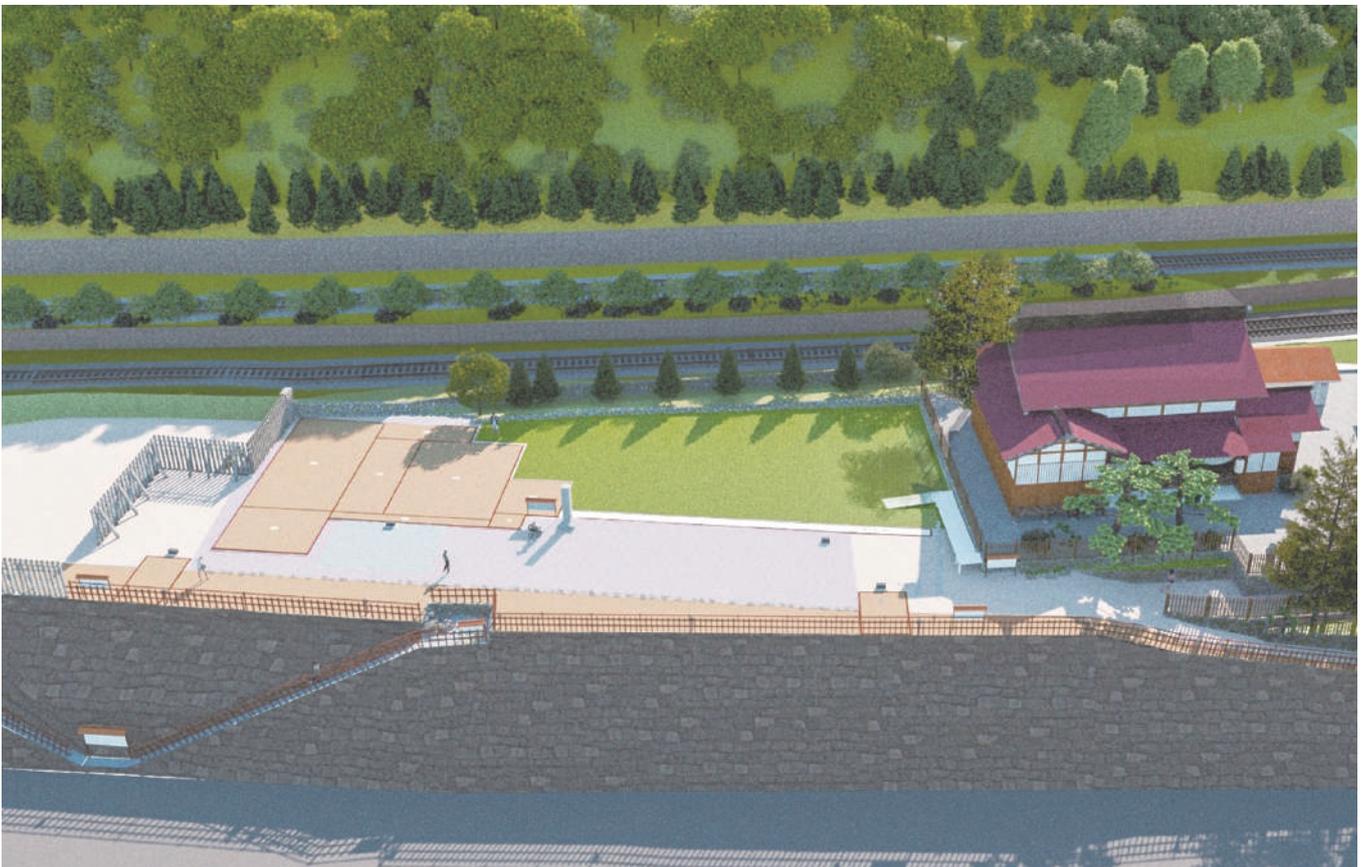
第3トレンチ南部の推定番所面（西側から）

された。

史跡福島関跡では詳細が不明な箇所が一部残されており、追加調査が必要な状況となっている。そのため、整備基本計画では今後必要となる調査の内容、範囲、実施時期を明記するとともに、その結果に応じて考えられる整備方法をあらかじめ想定して記載することとした。復元東門の再建については、あきらめずに長期計画のなかでその可能性に言及している。

整備の基本理念では、「維持管理と未来への継承」「価値の顕在化と活用」「安心安全の確保」の三つを柱に据え、まずは令和7年度（2025年度）に第5次発掘調査を実施したうえで、順次、既存構造物の撤去や基本設計に入っていく予定である。引き続き、関係各位のご指導を仰ぐとともに、目下史跡整備に取り組まれている自治体関係者の皆様とも情報交換させていただきながら、史跡の本質的価値とその保存・活用の必要性が多くの方々から理解されるよう努めていきたいと考えている。

（木曾町教育委員会 牛丸景太）



整備基本計画 完成予想図

埋文本棚



「現代のサラリーマンが縄文人のような暮らしをしたら、いったいどんな世界が見えるのか。」

本書はスーツ姿のサラリーマン2人組が、週末を使ってゼロから文明を築くことに挑むエッセイ。著者はYouTubeチャンネル「週末縄文人」として活動しており、本書では、彼らの活動の中で経験した苦労や失敗、成功の瞬間やその時々的心情を丁寧につづっている。

火起こしから始まるが、最初からうまくはいかない。火起こしのための道具を準備するところから、苦労が始まるのだ。火起こしだけでなく、土器づくりや石器づくり等でも多くの試行錯誤をし、思わぬ気づきを得ながら、少しずつ新しい道具を手にしていく。

本書の魅力は苦労や失敗の話だけでなく、その時々の方々の心情の機微にもある。キレイに磨き上げた石斧への誇らしさや愛着、せっかくなで作った土器が爆発したショック、ついに生まれた土器への感謝なども、おそらく縄文人もまた、抱いていたであろう心情を彼らからも感じることができる。

縄文時代に限らず、考古学に興味がある方にはぜひ一読をおすすめしたい。また、彼らのYouTubeチャンネルでは本書に収録されている挑戦の他にも、釣り針を作って釣りをしたり、編布を作ったりと彼らの挑戦はまだまだ続いている。ぜひともそちらものぞいてほしい。

(関杏介)

(『週末の縄文人』 週末縄文人 縄・文 著/産業編集センター)



とみ おまるやま
「富雄丸山古墳」は、奈良県奈良市に所在する4世紀代に築造された日本最大規模の円墳である。令和5年度(2025年度)に始まった第6次調査にて驚きの成果が上がり、『魏志倭人伝』や『宋書倭国伝』など中国の歴史書がない時期の古墳であるため、「謎の4世紀」と呼ばれるこの時期の解明が進むのではと期待されている。また近年は全国各地の巨大古墳の調査で多くの新事実が次々とみつかってきている。これらの成果をもとに、一般向けに分かりやすくまとめたのが本書である。

本書は、大きく6章で構成されており、調査関係者や地域の埋蔵文化財担当者など、多くの筆者が関わる。各地の古墳被葬者、墳形、造営など多くの視点から全国の巨大古墳と古墳時代の真相を解き明かそうとしている。また信濃の巨大古墳については、第5章「巨大古墳を築造した地方豪族の正体」のなかで触れられており、県内における地方豪族とヤマト王権とのつながりについてまとめている。

ぜひ手に取っていただき、最新の発掘成果から判明したロマンあふれる巨大古墳の研究へと足を踏み入れてみてはどうだろうか。

(丸山晃平)

(『巨大古墳の古代史』 瀧音能之 監修/宝島社)



『諏訪史第一巻』刊行100年記念事業について



明治10年(1877年)、モースによる大森貝塚の発見・調査で近代日本考古学の幕が開いた。それから50年と経たない大正13年(1924年)、『諏訪史第一巻』が刊行となった。関東貝塚地帯での研究がヨチヨチ歩きで始まって、その土器が「貝塚土器」などとも呼ばれたその頃である。

諏訪教育会では、先生たちもお金を出し合い、鳥居龍蔵の指導の下に寸暇を惜しんで遺跡を回り資料を集めた。7年の歳月をかけた成果こそ四六倍版650頁余の大著であった。最先端の学問成果が盛り込まれ、山奥の地に何と素晴らしい文化があったと、多くの資料が圧倒した。日本史を大根に例えてその一つの輪切りのこの地方誌は、確かに「大学紀要」のレベルを誇った。「一面には全體の日本古代史であるが如くに記述したとあるが如く、寧ろこれに過ぎた位にこの主張を全本文に溢れしめてゐる」とは当時の書評。他に「武蔵野の研究も正にこれらから比較して早く此種の学術的の纏まったものにして見たいものである」と、関東の研究を遙かに凌ぐ成果であると素直に認める書評もあった。「地方史の金字塔」なる形容を過言としない所以といえる。そして、諏訪に考古学が根付き、研究者が生まれ育った。

それから100年。その末裔たちの諏訪考古学研究会は、記念の節目に次の100年への弾みにと2本の柱を企画した。記念誌『『諏訪史第一巻』刊行100年一次の100年へ』の刊行と、諏訪教育会に加え郡内6市町村の垣根を越えた企画展の実施である。冊子には、100年前の学問の確認と現在の評価、そして当時の遺跡と現状、遺物の確認などを盛り込んだ。企画展は。当時は「旧石器時代」「縄文時代」などの名称はない。その時代をどのように認識したかという意味で「縄文時代観」など「観」を付し、各館(諏訪教育博物館・岡谷考古美術館・星ヶ塔ミュージアム矢の根や・諏訪市博物館・茅野市尖石縄文考古館・八ヶ岳美術館・井戸尻考古館)で現在の時代別に分担して成果や遺物を展示した。全館回ると当時の諏訪考古世界を見渡せた。

企画展は令和7年(2025年)2~3月。約350頁の記念誌は、開始に合わせ2月1日発刊できた。その記念誌、内容はさておき研究会の執筆17名中、20~40代が6名。マスコミはここを逃さず「若手会員が積極的に寄稿。会員の高齢化に伴う後継者不足に苦慮する郷土史研究団体が多い中で異彩を放っている」と注目した。企画展では、これまた若手学芸員が多くを回ってほしいと知恵を絞り、各館の特徴的な資料を消しゴムハンコで作り上げ、台紙を用意してのスタンプラリーを企画した。若い力の後押し強く、冊子のタイトル「次の100年へ」の第一歩を踏み出す、まさに弾みとなる事業となった。

(諏訪考古学研究会)



記念展のポスター・チラシ



記念誌『『諏訪史第一巻』刊行100年一次の100年へ』

日本考古学・人類学・民族学の学問分野で活躍した鳥居龍蔵は、千島列島、中国、台湾、朝鮮半島などのアジア大陸各地を駆け巡り調査した人物である。この鳥居が「諏訪」に足跡を残すことになった最大の理由は、諏訪史編纂東京主任で教科書にも掲載されている登呂遺跡の調査特別委員会初代委員長や東京帝国大学教授を務めた今井登志喜（現 岡谷市出身）が鳥居の自宅を訪問し、先史・原史時代の調査を依頼したためである。『諏訪史』第一巻の冒頭にある鳥居龍蔵の文章からそれがうかがえる。「こと」を動かす原動力には、裏舞台があったのである。



諏訪郡先史時代最高遺跡地（旧御射山遺跡）の調査員一行
（大正9年(1920年)撮影。中央下：鳥居龍蔵、右：八幡一郎。諏訪市博物館提供）

大森貝塚の発掘で誕生した日本考古学は、裏舞台で活躍した人物や因果関係の複雑な絡み合いによって「かたち」になった先人の業績が蓄積されている。この蓄積が「学史」である。先人の学問への姿勢とその業績を読み取り、自身の立ち位置を見定めること。したがって、調査・研究において「学史」を踏まえることが重要である。現在、研究者の「学史」離れが指摘されているが、かかる動向のなかで、若手の研究者が参画し、先人の業績評価とそれを次世代へ受け継ぐ方向を示した『諏訪史』第一巻刊行100年事業は、大いに意義深く評価できるものと私は考える。（河西克造）

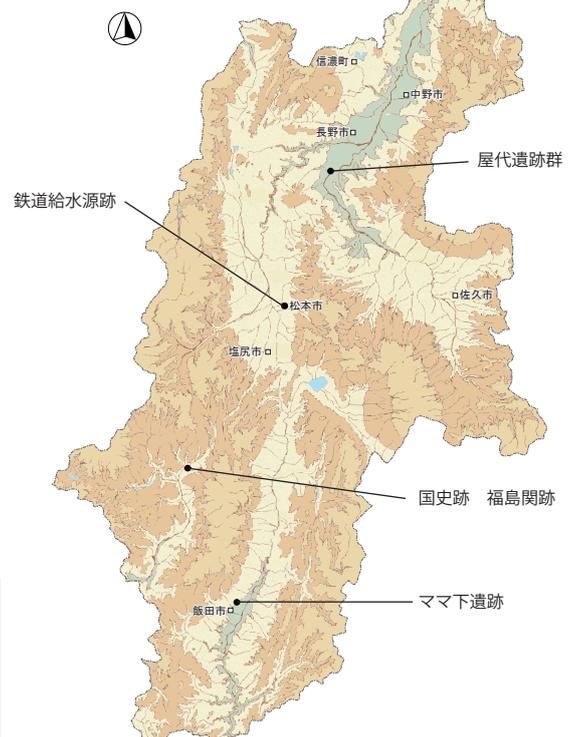
斎藤 忠 1979『日本考古学史資料集成』 吉川弘文館、斎藤 忠1984『日本考古学史辞典』 東京堂出版
坂詰秀一 2025「立正考古と今井登志喜」『考古学論究』第24号 立正大学考古学会、鳥居龍蔵1924『諏訪史』第一巻 古今書院

編集後記

『信州の遺跡』25号をお送りします。ご多忙の中、原稿を執筆いただいた皆様のおかげをもちまして、今号も内容豊かな情報誌とすることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

飯田市ママ下遺跡や千曲市屋代遺跡群では、古墳時代の地域社会を考察する上で非常に興味深い調査事例をご紹介いただきました。松本市鉄道給水源跡は、県内において希少な近代遺跡の調査を実践した重要な事例です。木曾町福島関跡では、46年前に国の指定を受けた史跡が、新たな整備を開始する第一歩を踏み出しています。諏訪考古学研究会には、我が国における地方史編纂の先駆けとなった『諏訪史』の刊行100年記念事業についてご紹介いただきました。重要な学史的出来事を記念した事業を展開し、学史を学ぶことの重要性を改めて気づかせていただきました。（村井大海）

本号で掲載した遺跡



（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：有限会社アツターロ